



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大都市における子育て支援の現状と課題：札幌市事例を中心に
Author(s)	金, 昌震
Citation	研究論集, 13, 437(左)-451(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54086
Type	departmental bulletin paper
File Information	026_KIM.pdf



大都市における子育て支援の現状と課題

—— 札幌市事例を中心に ——

金 昌 震

要 旨

本稿の目的は、出生率の向上や子育て支援の一環として運営されている日本の札幌市における子育て支援施設が持つ社会的機能を比較により明らかにすることである。

まず、子育て支援を行う公共の施設を素材にして、子育てに励んでいる親たちが直面している問題を考察する。次に、各子育て支援施設の中で形成されているネットワークにどのような違いが見られるのか分析する。最後に、日本における少子化対策や子育て支援のあり方について検討する。

そこで、本稿では、子育て支援施設で行った半構造化インタビューの調査結果を用いて分析を行う。その際、子育て支援施設で構築される「ママ友」集まりや子育てサークルが、コミュニティとしてどのような性質や特徴を持っているのか、金子の「三段階のコミュニティ論」を援用し、コミュニティ(集まり)の観点から分析する。また、子育て支援施設はどのような社会関係資本を生み出し、どのような機能を果たしているのかについて、社会関係資本論とネットワーク論から考察する。

本稿では、以下の手順で考察を進めていく。第1に、日本の少子化問題の傾向を踏まえて上で、調査対象地である北海道・札幌市の少子化の現状を明らかにする。また、子育てに対する不安・負担・ストレスの社会的な要因として第一次集団 (Primary Group) の変遷から考察する。第2に、札幌市における子育て支援施設の機能を把握し、それぞれの施設が生み出す社会関係資本を類型化する。また、各施設で構築された「ママ友」集まりの特徴や性質を比較し、「三段階のコミュニティ」のうち、どのような段階に該当するかについて分析する。第3に、各施設が生み出す社会関係資本の異なる機能を理解し、子育て支援としてどのように生かすかについて考察する。

1. はじめに

1-1 日本における少子化問題

少子高齢化社会のことを考える際には、ただ子どもが減っていることに対する問題意識だけではなく、人口減少や高齢化率増加の問題も同時に考える必要がある。

$$\text{高齢化率} = \frac{\text{高齢者数}}{\text{総人口}} \times 100$$

高齢化率は、次の公式で計算される。この数式では総人口を分母にし、高齢者数が分子になる公式なので、総人口が停滞もしくは減少（少子化）すると、分母が小さくなることによって高齢化率は必然的に上がる。また、高齢者数が増加（長寿化）すると、分子が大きくなるため、同じく高齢化率は上がることがわかる。

金子（2006）は、子どもの減少を少子化、高齢者の増大を高齢化と見なし、総人口が減少する社会の変化を「三位一体の人口変化」と捉え、「少子化する高齢化社会」と名づけた。

総務省の人口推計（2012年4月1日現在）によると、15歳未満の子どもの数は前年比12万人減の1665万人で、1982年以降、31年連続で減少し、2050年には8,070千人（9.7%）になる見通しである。さらに1989年の「1.57ショック」と呼ばれる合計特殊出生率の減少は継続し、2005年には1.26という最低の値を示すことになった。

その後2009年には1.37、2010年には1.39と増加したが、いずれにしろ、これは人口を一定に維持するために必要な2.08という水準を大きく下回っている。このように日本では少子化の傾向がはっきりしており、少子化への社会的対応が重要な課題になっている。

表1 日本の合計特殊出生率の推移

年度	1970	1980	1990	2000	2001	2002	2005	2006	2007	2008	2009	2010
日本	2.13	1.75	1.54	1.36	1.33	1.33	1.26	1.32	1.34	1.37	1.37	1.39

出典：（日本）国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2011」

1-2 北海道・札幌市の少子化現状

北海道の合計特殊出生率は、2005年の1.19から2010年の1.26へ0.7ポイント上昇したが、東京都の1.12に次いで全国2位の低出生力地域になっていることは変わりがない。とりわけ、その中心である札幌市は、1960年以降、統計数値がある中では、1965年の1.93をピークに、1971年から1974年の第2次ベビーブームの後から減少傾向が見られた。その後、一時的に上昇に転じた年もあったが、減少傾向が続き、2005年には過去最低の0.98となった。2005年から微増したものの、表2からわかるように2010年現在、1.09と、東京区部の1.08を除き、政令指定都市の中でもっとも低い水準に留まっている。

表2 全国・北海道・東京都区部および19政令指定都市の合計特殊出生率（2010年）

全国	1.39	順位	都市名	数値	順位	都市名	数値
北海道	1.21	6	相模原市	1.28	13	さいたま市	1.38
東京区部	1.08	7	神戸市	1.29	14	静岡市	1.42
1 札幌市	1.09	8	川崎市	1.30	15	堺市	1.43
2 京都市	1.17	9	新潟市	1.31	16	岡山市	1.45
3 仙台市	1.20	10	横浜市	1.31	17	広島市	1.47
4 福岡市	1.25	11	千葉市	1.35	18	北九州市	1.48
5 大阪市	1.26	12	名古屋市	1.36	19	浜松市	1.57

（注）政令指定都市は、平成22年（2010年）現在の19都市である。

出典：厚生労働省「2010年人口動態統計」

このように第三次産業に特化している政令指定都市で合計特殊出生率が低いのは、職住分離、長時間通勤、住宅の狭さ、1人暮らしのしやすさ、自由な匿名環境、自由意識、自由なライフスタイルの相乗効果によるものであると指摘されている（金子、2007：164）。

1-3 子育てにおける「喜び」と「負担」

子どもの出産にめぐる不安と子育てに対する負担・ストレスについては多様なマスメディアから大きく取り上げられ、少子化問題の深刻さや子育ての社会的課題がより鮮明になりつつあり、他方では経済・教育・福祉など様々な分野からその対策に関する議論が盛んになってきた。確かに、都市化、核家族化（小家族化）に代弁される現代社会では、結婚という選択をして新しいライフステージに入った親たちの出産や子育てに対する不安、負担は相当のものである。今回の調査でも子どもの出産や子育てから来る不安や負担について語ってくれたが、その内容をまとめると、「趣味の時間がない」や「ゆっくり休む時間がない」、「自分のための時間がない」という時間的負担、「夜泣きや夜中の授乳で大変」、「子どもの面倒を見ることで大変（お風呂、泣くときのおんぶなど）」の精神的・身体的負担、「おむつ代や粉ミルク代などでお金がかかる」という経済的負担があげられた。

しかし、近年の報道の内容や議論の方向性は、子どもの出産や子育ての楽しさや喜びが無視・看過されて問題の深刻さだけを強調しつつ、子どもの豊かな生き方や人権などについては議論せず、高齢者年金や生産人口の減少など経済的な側面を重視する傾向が見られている。

そのため現実の子育てに対するイメージが歪められて、むしろ否定的なイメージや感情を過剰に与えるようになったことも事実であろう。その結果、近い将来に親になる人や現在子育て中の親に出産や子育てが望ましくないものとして理解されていて、出産や子育てを控えたり、忌避する原因になる可能性もある。ところで実際、子育て中の親は自分の子育てに対してどのようなイメージや感情を持っているのだろうか。

表3 子育ての楽しさ

そう思う (計:83.6%)		そう思わない (計:16.1%)		
とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無回答
22.7%	60.9%	15.7%	0.4%	0.3%

注) 東京都内に居住し、0歳から9歳の子どもを持つ母親3000人を無作為抽出。70.3%回収(2,108人)
 出展: 東京都教育庁生涯学習部『子育て中の女性の意識と学習支援のあり方に関する調査報告』

表3と表4は親における子育ての楽しさを表しているものである。

2000年度に東京都教育庁生涯学習部がまとめた『子育て中の女性の意識と学習支援のあり方に関する調査報告書』では「子育てを楽しんでいますか?」という質問について肯定的(とてもそう思う22.7%/そう思う60.9%)に答えたのが83.8%であり、否定的(まったくそう思わない/あまりそう思わない)に答えたのが16.1%であった。この調査は0歳から9歳の子どもをもつ母親を対象したものだが、小学3年生~中学3年の子どもをもつ保護者を対象にした調査でもほぼ同じ結果が見える。

表4 子育ての楽しさ(経年比較)

	とても楽しい	まあ楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない	無回答・不明
1998年(4,475)	19.8%	69.3%	8.4%	0.6%	1.9%
2002年(4,896)	21.2%	64.5%	9.7%	1.1%	3.6%
2007年(5,315)	20.0%	66.3%	10.3%	1.2%	2.3%
2011年(6,020)	20.1%	67.2%	10.0%	0.9%	1.8%

注1: 小学3~中学3生の数値 注2: ()内はサンプル数
 出展: ベネッセ教育研究開発センター『第4回子育て生活基本調査』

2011年の『第4回子育て生活基本調査』(ベネッセ教育研究開発センターが4年ごとに実施)では「子育てが楽しいですか」という問いについて肯定的(子育てはとても楽しい20.1%/まあ楽しい67.2%)に答えたのが6,020人中、87.3%であり、否定的(ぜんぜん楽しくない10.0%/あまり楽しくない0.9%)に答えたのが10.9%であった。

今回のインタビュー調査でも、以上の調査と同様に子育てに対するポジティブな側面が、ネガティブな側面をはるかに上回っていた。「子どもを成長する姿を見ることが楽しいです。」「子どもの存在自体が喜びです。」「子どもの笑顔を見ると幸せな気分になります。」「子どもを通じて学んだり自分自身も成長した気がします。」などがその例である。

調査の結果からわかるように、世の中の親たちは例外なくみんな出産や子育てに対する不安や負担を感じながらも子育てに励んでいるし、出産や子育てに対する不安、負担というネガティブなイメージや感情より、子育ての楽しさ、喜びというポジティブな側面をより重視している。

このように子どもの出産や子育てに対するポジティブなイメージや感情を持ちながら、前向

きで子育てに向き合う親たちを社会はどのように支援すべきなのか。出産や子育てに起きる不安、負担、育児ストレスなど、ネガティブな側面を軽減し、より楽しく喜びながら育児するためにはどうすれば良いのだろうか。その結論に至るまでの手掛かりを探るために今回の調査の結果を踏まえて考察したい。

2. 調査の方法と対象

2012年6月から2013年3月まで、札幌市における子育て支援施設である札幌子育て支合（総合）センター、児童会館（エルム森、平和、東札幌）を訪ね、子育て中の祖父母、父母計30名に聞き取り調査（半構造化インタビュー）を実施した。

対象者全30人中26人は女性でほぼ専業主婦であり、男性は4人であった。年齢は20代～40代が主な年齢層であり、祖父・祖母の場合には60代であった。家族形態を見ると夫婦と未婚の子どもで構成された核家族が全員であり、子ども数は1人が20名、2人が9名であった。対象者の現在の子ども数と理想の子ども数は、ほとんど一致していない場合が多く、理想の子ども数より現在の子ども数が少なかった。また、現在の子ども数と理想の子ども数が一致している対象者は、障害の子どもを持っている母親・高齢出産にともなうリスクを恐れる母親であった。

主な質問項目としては、①子育て支援施設の利用状況、②子育ての喜び・満足、③子育ての負担・不安・ストレス、④出産希望と理想の子ども数、⑤ママ友の有無、⑥子育て基金の賛否、⑦フェイスシート（性別、年齢、職業、学歴、家族形態、年間収入）などがある。

調査対象の施設は子育て支援施設である札幌市子育て支援（総合）センターと児童会館（エルム森児童会館、東札幌児童会館、平和児童会館）とした。

まず、札幌市子育て支援（総合）センターは、親子や地域の皆が自由に交流できる施設であり、現在は北区、東区、白石区、豊平区、清田区、西区、手稲区の7区に設立され、地域において子育て支援の中心的役割を担っている。その七つの子育て支援センターを総括し、全市的な子育て支援の中核を担う施設として札幌市子育て総合センターがある。

また、児童会館は（エルム森児童会館、東札幌児童会館、平和児童会館）は、同・異年齢集団での遊びを通して、仲間づくりをすすめ、地域社会での交流を活性化する目的で設置・運営している施設である。高校生までの子どもたちも自由に利用が出来るし、就学前の子どもには、保護者と一緒に遊んだり、子育てサロンの場を開いて子育てサークルの活動の場を提供している。2012年度現在104箇所の児童会館が運営されている。

このように少子化問題に対し、日本では出生率を向上させるために、子育てしやすい環境の整備が少子化対策として進められ、子育て支援施設が各地で運営されている。

本調査では地域における子育て支援に限定し、特に低年齢児の子育てを支援する施設に焦点を当てる。

3. 調査結果と考察

3-1 少子化による第一次集団 (Primary Group) の変遷

戦後以降の地域社会では子ども同士の群れが多く見られ、遊びたいと思えば遊ぶ機会も多く、異年齢でのかかわりもあり、そこではたくさんの学べることがあった。遊び仲間に入れてもらうために手だてを工夫したり、わがままが通らないことを体験したり、年少の子どもが年長の子どもの行動を観察し模倣したり、逆に年長の子どもが年少の子どもの面倒をみることなどを通して、弱い立場の人に配慮する志を感じたりするような、子ども集団なりの学びがあった。しかし、少子社会である今日のような時代では、地域で子どもの遊び仲間や集団を作ることが難しくなっている。

かつて地域社会でよく見かけた子どもの遊びの群れは、子どもの人間形成や社会性を身につけるために基礎的で第一次的なものであり、これは第一次集団 (Primary Group)^{*1} に当たる。

子どもたちは成長により異なるライフステージに入り、あらゆる段階で発達課題を成し遂げながら成長してゆく。その時、子どもたちに大きく影響を及ぼすのが遊び仲間である第一次集団であることは言うまでもない。

社会性の形成という観点から言えば、人々が所属する様々なコミュニティの人間関係を通じて、その社会で広く共有されている規範や、基礎的な知識を身につける過程としての子どもには、第一次集団である遊び仲間がその人間形成や社会性の形成に必要な不可欠な集団になる。

伊藤 (2005) は子どもの社会化 (ソーシャライゼーション) について親や保育者、教師のような縦の人間関係から得るものだけでは果たしえないと言い、加えて、兄弟のような縦と横の両方の要素を含んだ関係や対等な横の関係である仲間との関係をたくさん経験することによってはじめて、子どもの社会化が前進し、深まっていくものであると主張している。

しかし、時代の変化により第一次集団の変遷も著しく見られるようになってきた。産業化や都市化が進むことによって、かつては地域社会で多様に存在した第一次集団が縮小し、崩壊しつつあり、その機能も弱まってきた。さらに地域過疎化や少子化が深刻化すると共に、子どもたちはますます地域社会の中で第一次集団である遊び仲間を形成することが困難になった。

S6 (男・38歳) さんのインタビュー内容はこの事実を物語っている。

「今の子どもたちは、私の子どもの時代とはちょっと違うと思います。昔は家から勝手に外に出て朝から晩まで遊んでまっくろけになって家に戻った思い出がたくさんありますが、今の時代では子どもの数も少ないし、外で遊ぶ子どもたちの姿を見かけるのが難しいですね。」

¹ C. H. クーリー (1909=1970) は「社会組織論」で第一次集団 (Primary Group) とは個人の社会性と理想とを形成する上で基礎的であるという点において第一次的なものであると定義し、家族、子どもたちの遊び仲間、近隣、もしくは大人たちの地域集団などがそれに該当すると述べている。

S6さんは自分の幼い頃と自身の子どもの時代（今の時代）を比べて語っていたが、そこに述べられていたのは子どもにはない地域社会に存在した多様な「遊び仲間」であった。このような遊び仲間や集団が縮小し崩壊したのはなぜだろうか。

第一次集団（Primary Group）の縮小や崩壊の大きな原因としては、遊び空間・遊び時間・遊び仲間の減少が挙げられている。

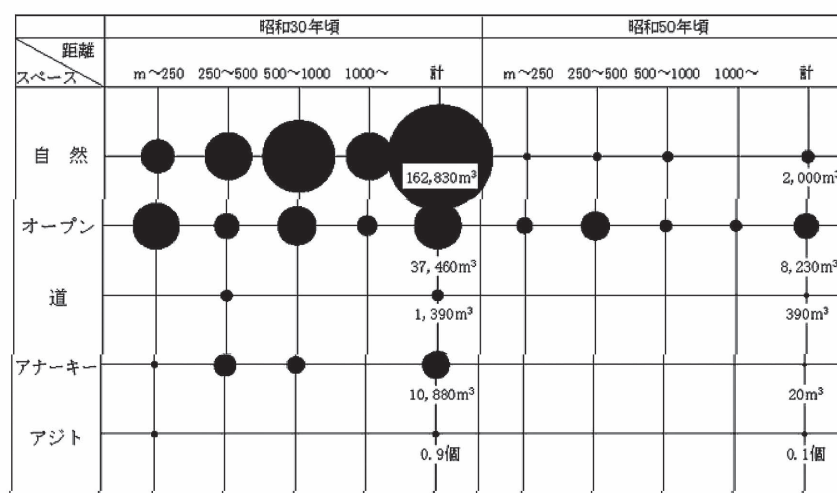


図1 横浜における遊び空間量の比較

出典：仙田満『環境デザイン講義』（彰国社，2006年）

図1は都市における平均的な子どもたちの遊び空間の変化を表している。横浜市では昭和30年頃から昭和50年頃にかけて特に自然スペースが80分の1まで減少したことがわかる。

図2は昭和30年（1955年）から平成3年（1991年）までの遊び時間の変化を表している。一番目立つのは戸外遊び時間が減る一方で室内遊び時間が増えることである。

子どもの遊び空間の減少や遊び時間の変化について仙田（1992）は、日本の子どもたちの遊び環境は、1965年頃を境に自動車交通の発達やテレビの普及によって、遊び空間が減少し、また外遊びから内遊びへと子どもたちの遊びの主流が変わったと指摘している。

このような子どもの遊び環境をめぐる時代の変化は、第一次集団に大きな影響を与えて集団の存在の問題（量的）にも集団の性質の問題（質的）にも変化を起こしていると考えられる。

図3，図4，図5は時代の変化による第一次集団の変遷を表しているものである。

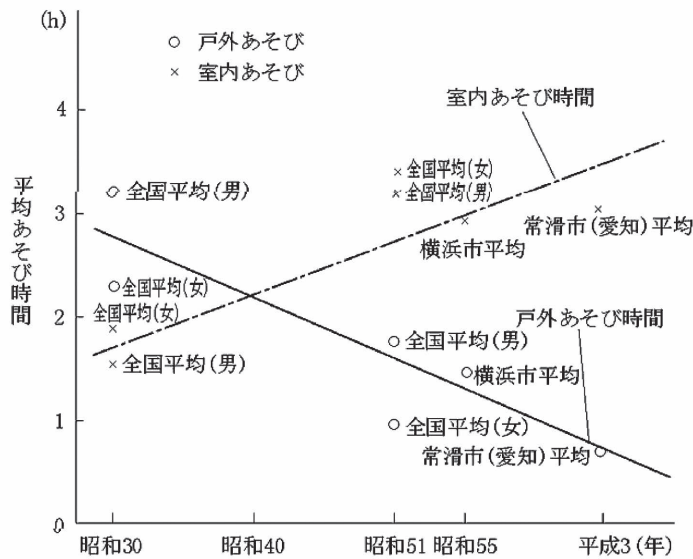


図2 遊びの時間の変化

出典：仙田満『子どもとあそび』（岩波新書，1992年）

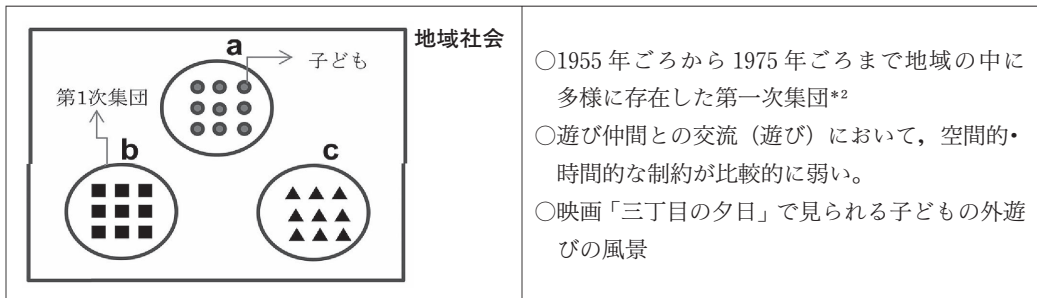


図3 様々な第一次集団（Primary Group）

図3でわかるように，かつての第一次集団が多様に存在した時代では，子どもに自由な時間，遊べる空間，そして遊び集団がたくさんあったので，遊ぶことに対する時間的・空間的な制約が比較的弱かった。また，遊びも鬼ごっこ，缶ケリ，ケイドロなどの戸外遊びが中心になっていて，群れを形成して遊ぶことによって同・異年齢の交流が自然に行われた。

² 仙田（1992）はこの期間について，日本の高度成長と都市化による影響を受け，子どもたちの遊び空間が極めて小さくなり，テレビ等の影響，核家族化，コミュニティの喪失などにより，遊び集団が減少していく「第一の変化」として捉えている。

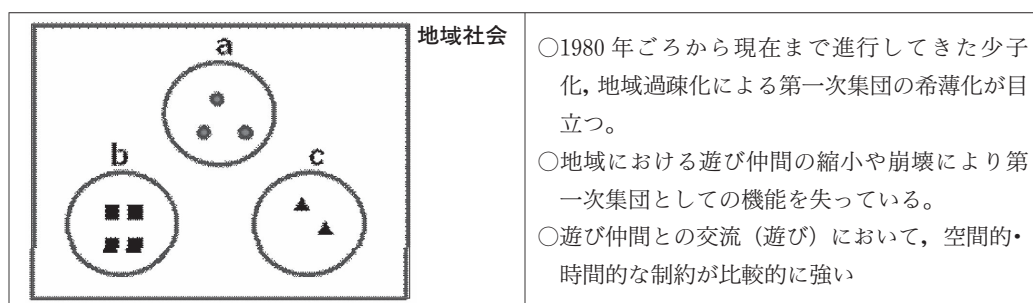


図 4 縮小・崩壊しつつある第一次集団（Primary Group）

しかし，近代化が進むにつれて，都市化による地域過疎化や核家族化・少子化はかつての第一次集団である遊び集団（仲間）を縮小し崩壊してきた。その結果，図 4 のように地域社会では第一次集団が希薄化され仲間との交流（遊び）にも空間的，時間的な制約が生じた。

ところで地域過疎化や少子化によって縮小や崩壊してきたいくつかのメンバーや集団を相互に統合し，新たな集団に再編する試みが現在進行している。図 5 のように第一次集団として本来の機能が失われている集団を統合し，再編することによって第一次集団の再建につなげようとする動きは大都市ではよく見られている。札幌市においては札幌市子育て支援（総合）センターや児童会館がその典型的な例で「統合→再編→再建」の機能を果たしていると考えられる。

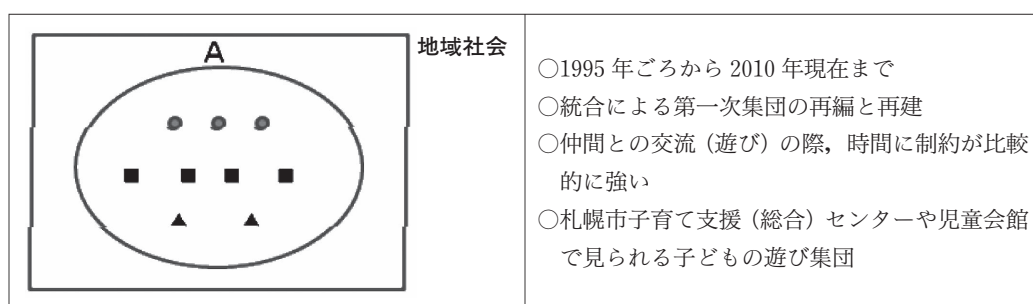


図 5 統合・再編された第一次集団（Primary Group）

子供たちが遊び集団としての第一次集団を形成するためには遊び空間と遊び時間，それに遊び仲間が必然的に必要となる。それは同じ時間で一定の空間を共有し合う仲間がいない限りは第一次集団の形成は成り立たないからである。また，縮小し崩壊している遊び集団を新たな第一次集団として統合し再編したとしても，いかなる空間で，どのような時間を，どんな仲間と過ごしたのかが問われる時代になっている。

地域で第一次集団（Primary Group）の崩壊や希薄化によって子育て不安・負担・ストレスなどが拡がるなか，一緒に遊べる仲間・空間・時間を子どもに提供しているのが，札幌市子育て

支援（総合）センター，児童会館（エルム森，東札幌，平和）である。とりわけ，子育て支援施設のなかで運営されている子育てサロンでは，集団活動や異年齢の子どもとの遊びを通じて社会性や人間形成を培う場として注目されている。

また，親にとっても，同じ年齢の子どもを持つ親同士が交流することで，子育ての不安や悩みを気軽に話せる仲間を作ることができる。また，支援者や他の参加者がいる安心できる場所で子どもを遊ばせ，子どもと少し離れることで，子育てのストレスが軽減されることもある（橋本，2007）。

3-2 子育て施設で構築される「ママ友」集まり

各支援施設での子育てサロンから作られた関係性に，いわゆる「ママ友」の集まりがある。ママ友とは「子どもを介した母親同士の友人関係」のことであり，通常の友人関係とは，様々な点で異なる特徴を持っていると考えられる。

各子育て支援施設を利用する子どもや親が，その場を使ってどのような関係性を構築するかについて，金子の「三段階のコミュニティ論」から分析したい。

金子（2011）は，個人中心でも地域集団・団体を軸としても構わないが，一定の空間内部に集まりができればコミュニティ作りへの萌芽はあり，それが育つかどうかはその集まりの程度の強さによるものと指摘しながら表5「集まりの3類型」を提案してきた。

表5 集まりの3類型

第1段階	Coming together is a beginning	実践的集まりの創造から開始
第2段階	Keeping together is progress	実践的集まりの維持が前進
第3段階	Working together is success	実践的集まりの活用が成功

出典：金子（2011）

まず，“Coming”について述べると，支援センターと児童会館を利用する理由としては「支援センターは土日もやっているので利用したいときに来ることが出来るので便利です。（S4）」，「家の近くにあるから歩いて来ます。（H1）」，「市内の中心地にあるので時々利用しています。（S3）」，「広くて安全だし，家にはない遊具が揃っているので楽しいです。（S5）」，「同・異年齢の子どもとの遊びができるからです。（S6）」という回答があった。つまり参集した利用者は，施設の開放性・近接性・安全性・快適性・交流性などを求めていることがわかる。このように第一段階（Coming）では人々が自由に行き来できる開放性・近接性が重要であり，加えて人々を誘引する魅力である安全性・快適性・交流性を備える必要がある。しかし，この段階では利用者同士のつながりはまだ生じていないことが多い。

また，支援センターでママ友になったきっかけについて調べた結果，「子どもを出産するとき

助産所（病院）で知り合った人です。（S1）」、「前から知り合いの友達です。（S10）」と答えた人が多かった。これらの結果からわかるように、現在支援センター内部において、自発的なママ友集団は形成されていなかった。それに対して、児童会館では、「子どもと一緒に遊びに来た時、児童会館の子育てサロンで会いました。（HS1）」、「ここに来るといつも知り合いのママ友がいるのでおしゃべりが楽しいです。（H2）」という答えがあった。今回の調査で得られたように、「Coming」ができるような諸施設を備えた上で、児童会館のようにママ友づくりやボランティア活動への参加など個人間・集団間につながりができるように情報や機会を与えることが、次の段階にある実践的集まりの維持（Keeping）につながるとされる。

最後に、子育てサロンで出会ったママ友との付き合いや交流について尋ねると、「児童会館以外の場所で定期的に会ったりして、お互いに育児情報を交換したり、育児の悩みを話しています（E2）」、「互いの家の子連れで遊びに行ったり、ちょっとだけでも子どもを任せることが出来て助かります。（HS2）」という回答が得られている。これらから、子育てサロンで作られたママ友の活用（Working）によって「Keeping」が維持され、それがまた「Coming」につながる「好循環」の構造を持っていることがわかる。

第三段階である「Working」については、多少抽象的な概念であるため、この「Working」に関するより具体的な意味づけや定義が必要となる。なぜなら、「Working」とは共同目標を追求する過程としての個人間・個人と集団間・集団間の相互作用であり、この「Working」が可能になるためには成員間の共同目標（利益）が必要となる。人々が共同目標を追求する過程の中で紐帯（相互作用）が生じ、この段階で見られるつながりは他の段階より強く、結束を強化する働きを見せている。

また、この段階に入ると構成員の立場も大きく変わって「支援を受ける側から、支援する側へ」の立場の変化も見られる。具体的に、初めはサービスの需要者であった個人や集団がサービスの供給者として活動する変化である。その典型がエルム森児童会館のママ友グループであり、かつては子育て支援を求めてきたメンバーたちがすでに新しく参加した親に情報を提供したり、ママ友グループの核として活動している。

しかし、ママ友の集まりでの「Working」と一般的な「Working」については性質が異なることを指摘したい。

ジンメル（1917=1979）は国家としての社会・経済活動を行う社会・何らかの目的概念によって結び合わされた社会も確かに「社会」であるが、むしろ社会的社会こそ純粋の「社会」と主張している。ママ友の相互作用にはジンメルが言う「社交」が感じ取れる。一般生活に

³ ジンメル（1917=1979）は『社会学の根本問題—個人と社会』で一般生活にあるような目的や動機といったものがそこではなく、自己や他者の満足まで重視し、純粋にその場で交わされる相互作用自体を楽しみたいという衝動を「社交衝動」と呼んでいる。

あるような目的や動機がなく、純粹に会っておしゃべりやコミュニケーションをする、つまり相互作用自体を楽しみたい「社交衝動」*3が見られるからである。

この意味でママ友の中での“Working”は特定の利益を追求するのではなく、相互作用自体を楽しみたいことや組織体になれなかったことから本来の“Working”*4から区別するために「初期的・純粹的・社交的 Working」と呼べるだろう。

3-3 子育て施設が生み出す社会関係資本

子育て支援施設はつながりを待たない子どもや親、それに地域社会の人々に仲介者として一定の空間を提供し、つながりづくり（強い紐帯と弱い紐帯）の機能を果たしているので社会関係資本を生産していると言えるだろう。

社会関係資本の定義には実に様々なものがあるが、人々が他人に対して抱く「信頼」、それに「情けは人のためならず」「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉に象徴される「互酬性の規範」、人や組織の間の「ネットワーク（絆）」という要素で定義されている（稲葉，2011：26-27）。

また、パットナムは2000年に発刊した『孤独なボウリング』で、社会関係資本を、メンバーの選択や必要性によって内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していき社会的に強力な接着剤の役割をする結束型（bonding）社会関係資本と、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すことができ、社会的な潤滑剤の役割をする橋渡し型（bridging）社会関係資本に区別して論じている。

さらに、社会関係資本をどちらか一方に社会ネットワークがきれいに分けられるといった「カテゴリ」ではなく、社会関係資本のさまざまな形態を比較するときに使える、「よりその傾向が大きい、小さい」という次元で論じるものであると主張している。

集団内部における個人ネットワークの強さ・弱さの特徴について、グラノヴェッター（1973＝2006）は職探しにおける弱い紐帯の効果に着目し、有効性があると論証する中で、個人と個人の間の二者関係、つまり紐帯の関係性の強さを、「ともに過ごす時間量・親密さ・情緒的な強度・相互の助け合い」によって定義している。

このような次元から子育て支援施設が生み出す社会関係資本の特徴を比較し、「結束型・橋渡し型」の社会関係資本の枠組みで分析した。

支援センターでは持続的に利用する人々（リピーター）より一時的な利用が目立つ。また、施設利用の目的にもセンター利用自体が目的ではなく付随的な利用が比較的が多かった。「妻が札幌市内で買い物するのでセンターで子どもと遊んでいます。（S18）」、「嫁がパートの仕事をし

*4 初期的・純粹的・社交的 Working と対比し、論じている“Working”とは、何らかの問題意思や目的で繋がって活動をしていく組織化された集まりである。子育てサークル活動から発展した活動で、単一のサークル活動を超えて「子育てネットワーク」が生まれた組織などがそれに該当する。

ている間、孫と一緒に利用しています。(S19)」などの例でわかるように買い物や仕事をする間に一時的・付随的に利用する様相が見られている。

1990年代から設立された支援センターは、まだ数少ない施設であるが、開放性（土・日・祝日も開放）や接近性（都市の中心部、交通の利便さなど）のメリットで、特定地域に限らず、多くの人々が利用している。また、利用する人々にその人が住んでいる地域の子育て支援施設や子育て支援活動など様々な情報及び出会いの機会を与えている。これらによって支援センターは互いに知らない人と人が繋がる橋渡し機能を発揮している。これは本来、支援センターが指向している中核的な機能であり、「ネットワーク内の2点を間をつなぐ唯一の経路(path)」(グラノヴェッター, 1973=2006:128)としての橋渡し型(bridging)社会関係資本の傾向が顕著に見られる。

一方、児童会館の場合は支援センター内部では発見ができなかったママ友グループが存在し、児童会館以外の場所でもその集まりが維持・活用される事例が見られた。エルム森児童会館では「初めて是利用した時は、私以外はもうみんなが知り合いで声をかけにくかったです(E1)」という答えがあり、ママ友集まりの個人間の結束が比較的に強く、親密な繋がりで結ばれていることが、むしろ新しいメンバーらが集まりにうまく入り込むことを阻害していることが明らかになった。

また、支援センターと比べると各地域に多く存在する児童会館は、近くに住んでいる人々が利用する点で地域に密着した施設である。このように同じ地域で同じ子育ての問題を抱えている人々が、互いに親密な関係を作り、直面している問題を共に解決しようとする側面では、結束型(bonding)の傾向が顕著に見られるというのが調査の結論である。

この結果を金子の「集まりの3類型」に照らしてまとめると、支援センターは主に橋渡し型であり、“Coming”に当たり、一方エルム児童会館は結束型であり“社交的 Working”に当たる。

3-4 社会関係資本の形成による子育て支援

子育て支援施設が、地域の中でどのような数で、どこに位置し、どのようなサービスを提供しているのかは、施設が生み出す社会関係資本の性質に大きな影響を与えている。それぞれの施設が生み出す社会関係資本の本質を理解し、それを生かして子育てに対する不安・負担・ストレスを軽減しながらより楽しく子育てができる子育て支援ネットワークを作るためにはどうすべきなのか。

一つの方法としてそれぞれの施設が生み出す異なる社会関係資本をより強化するという方向性が上げられる。具体的に言えば、支援センターは数少ない箇所の弱点を、地理的な利点（都市の中心部、交通の利便さなど）を生かして、橋渡し型(bridging)の社会関係資本をより強化する方向へと勧めていくことである。支援センターを利用する人々に子育てに関する様々な情

報や活動を伝え、その人が住んでいる地域で行われている子育て支援施設（児童会館など）や活動（ママ友グループ）に接する機会を与える。これらが本来支援センターの持つ中核的な機能であり、橋渡し型（bridging）の社会関係資本を強化する方向である。

また、児童会館の場合は支援センターと比べて地域に多く存在し、近くに住んでいる人々が利用する点で地域に密着した施設である。このように同じ地域で同じ問題を共有している人々の共通点を生かし、互いに親密な関係を作り、直面している問題を共に解決していくには結束型（bonding）の社会関係資本をより強化する必要があると考えられる。支援センター・児童会館は施設の位置・数の問題などに伴う弱点を、施設の機能の分担・機能の特化・専門化によって補うことでそれぞれの施設が生み出す社会関係資本をより強化できるだろう。

最後に、施設内部でできた集まりに対しては“Coming”から“Keeping”に、最終的には“社会的 Working”の段階に発展するように、支援が必要となる。また、その集まりがより成長するためにはメンバーらがお互いに親密な関係で外に向けて開放的であることが不可欠である。

パート（2001=2006）は社会関係資本の効果をより高めるためには、集団内の閉鎖性が高いこと（結束型のような緊密なネットワークが集団内のメンバーを結び付けている）、集団外に広がる数多くの接触相手が存在することを強調している。

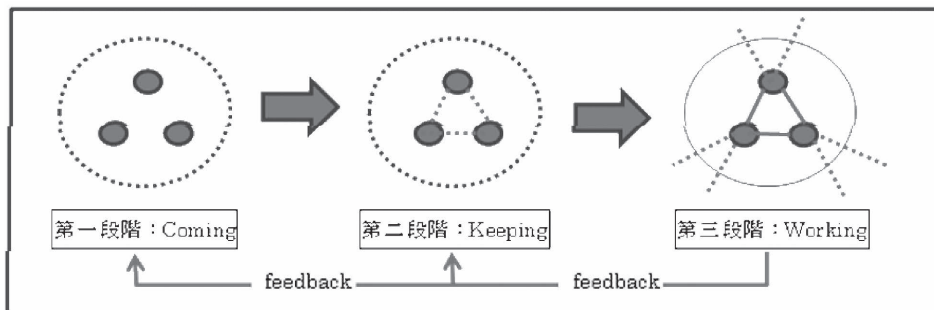


図6 集まりの3類型によるネットワークづくり

（注）R. S Burt 「社会関係資本の効果」、金子「集まりの3類型」より作成

図6は集まりの3類型によるネットワークづくりについて、個人と個人の紐帯の強弱と集団の閉鎖性をその要素として、その程度を実線（強い紐帯、閉鎖性高い）および破線（弱い紐帯、閉鎖性低い）を用いて表している。

（きむ ちゃんじん・人間システム科学専攻）

【参考文献】

赤川学，2004，『子どもが減って何が悪い？』精興社。

- 伊藤則博, 2005, 『子どもの育ちを支援する』ことのは舎.
- 稲葉陽二, 2011, 『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書.
- 金子勇, 2006, 『少子化する高齢化社会』NHK 出版.
- 金子勇, 2007, 『格差不安時代のコミュニティ社会学』ミネルヴァ書房.
- 金子勇, 2011, 『コミュニティの創造的探求』新曜社.
- 汐見稔幸, 2000, 『親子ストレス』平凡社.
- 清水幾太郎, 1950, 『社会学講義』岩波新書.
- 富永健一, 1995, 『社会学講義』中公親書.
- 仙田満, 1992, 『子どもとあそび』岩波新書.
- 仙田満, 2006, 『環境デザイン講義』彰国社.
- 盛岡清美他, 1983 (2004), 『新しい家族社会学』培風舘.
- 橋本真紀他, 2007, 『よくわかる家族援助論』ミネルヴァ書房.
- Burt, Ronald S., 2001, “Structural Holes versus Network Closure as Social Capital.” in Nan Lin, Karen Cook, & Ronald Burt (Eds.), *Social Capital: Theory and Research* (Pp. 31-56), Aldine de Gruyter. (=2006, 金光淳訳「社会関係資本をもたらすのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 243-281.)
- Charles H. Cooley, 1909, *Social Organization: a study of the large mind*, Charles Scribner's Sons, New York. (=1970, 大橋幸・菊池御代志訳『社会組織論——拡大する意識の研究』青木書店.)
- Granovetter, Mark S., 1973, “The strength of weak ties”, *American Journal of Sociology*, 78: 1360-1380. (=2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス・ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-158.)
- Robert D. Putnam, 2000, *Bowling alone: The collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書店.)
- Franz-Xaver Kaufmann, 2005, *Schrumpfende Gesellschaft: Vom Bevölkerungsrückgang und seinen Folgen*, Suhrkamp Verlag Berlin. (=2011, 原俊彦・魚住明代訳『縮減する社会——人口減少とその帰結』原書房.)